

2020年度

三重大学 人文学部法律経済学科

特殊講義 「協同組合論」



<第1回(ZOOM)>

「企業・行政と市民セクターとしての協同組合」

青木 雅生／三重大学人文学部教授

三重大学で2020年度「協同組合論」全15講義が始まりました。今年度の講義は全てリモート（ZOOM、オンデマンド）での講義となります。協同組合とは何か、どのような役割があり実践があるのか、そして協同組合の今後について、学び考えます。

第1回（10月5日）：受講49名（市民開放授業一般受講者等を含む）

現代の資本主義社会において活動する組織として、企業や行政などのほかに市民セクターがある。そのひとつが協同組合である。

協同組合論は、市民などの自発性に基づいて組織される協同組合の本来の役割や意義を歴史的な経緯も含め理解し、現代社会の諸問題について考え、未来への課題を共有し、検討していくこと、協同組合と未来を担う学生との関係、地域との関係などの可能性についても検討していく。

【第1回／講義の要旨】

- ・ 授業の概要や、講義形式、すすめ方、到達目標などについてガイダンスをおこなった。
- ・ 社会、とくに経済は、資本主義経済における企業の競争によって、社会や生活は豊かになってきた。その一方で社会生活の安全安心を脅かす種々の問題が引き起こされている。
- ・ 現代の資本主義社会において、企業と行政では担いきれず、市民の自発的・主体的取り組みによってまかなわれている。その主だったものに協同組合がある。
- ・ 協同組合が、なぜ生まれ存在するのか、経過や現在の活動と課題、未来においてどのような役割が期待されているのかを検討することが必要である。
- ・ 協同組合を一口に言えば「たすけあい」の組織である。資本主義経済の進展とともに貧富の格差が著しくなる中、競争原理とは一線を画しつつ消費者や生産者たちが対抗する組織として協同組合を設立する動きが広がってきた。
- ・ 協同組合は、共同で所有し民主的に管理する事業体を通じ、共通の経済的・社会的・文化的なニーズと願いを満たすために自発的に手を結んだ人々の自治的な組織である。
- ・ 企業でも行政でもない存在として組織・団体の中で、協同組合を取り上げ、現代と未来における協同組合の存在意義と役割を考えたい。

第1回講義／受講生のレポート（抜粋）

- ・協同組合とは、事業を通じて人々の共通目的を達成する組織と定義されており、人々の生活の向上を目指すだけでなく自助と相互扶助によって長期的、多面的、利他的に事業を運営する組織であることが理解できました。行き過ぎた市場経済の競争によって、経済の混乱や過度な貧富の格差拡大、地球環境への悪影響、長時間過密労働による障害といったさまざまな問題が引き起こされており、その中で協同組合が担う役割はますます大きくなっているように感じました。また、人と人とのつながりを大切にし、支え合うことによって生き甲斐を感じられる社会を形成していくことにおいても協同組合は大きな役割を担っていると感じました。協同組合は私たちの生活に密接に関わっており、今まで協同組合について考える機会はあまりなかったため、この講義を通してその存在意義や役割、歴史的経緯などについて学び、理解を深めていきたいと思いました。
- ・法律経済の授業では私的組織である企業について学ぶことが多いが公的な部分の担い手となっている協同組合ならではの良さや必要性をしっかりと理解したい。共通の経済的、社会的、文化的なニーズと願いを満たすために自発的に手を結んだ自治的な組織が今の自分にはあまりよくわかっていない。なぜ競走にならないのか、事業において協同するメリットはなにか、またデメリットはなにかを理解したい。昨年までとは違い今年は新型コロナウイルスの影響で日本や世界が大きく変わったので協同組合がその環境下でどのように活躍できるのかを期待して講義を受けたい。今回一番心に響いたのは、自らを助けよとする自助が、他者を助ける他助になることだ。反対に他助が自助になる関係が成り立てば理想的であると思う。新型コロナウイルスによって人と人のやりとりや繋がりがなくなってきている中で、協同組合がリアルな人と人の繋がりが重要視しているため、新しい繋がり方も必要になってくるのではないかと思う。逆に言えば新たな可能性があると考えます。
- ・人と人とのつながりが基盤となっていて協同組合は、新型コロナウイルスによる影響を大きく受け、大変な思いをしているのだと思いました。政府や企業だけでは補えない部分がたくさんあり、私たちの生活にとって、とても重要な部分を担っているということを知り、より身近なものにしていきたいと思いました。共同でもなく、協働でもなく、協同であるということが大切であり、これらの言葉の意味の違いを理解することは重要だと思いました。協同組合を存続させ、変わっていく社会に適応させていくために未来について考え、課題を克服していくことが大切だと思いました。
- ・協同組合は時代とともにさまざまな形態のものが、さまざまな役割を果たしていることより、協同組合というものは多様性に溢れていて、時代の特徴をよく反映しているのではないかと感じた。そして、現代は急速に発展してきていることから、従来の協同組合の枠組みとは違ったものになっていくかもしれないと考えました。
- ・企業や行政は多くのことの実行が可能ではあるが、対応できない部分も存在する。そのときに自らの問題を解決するために個人で行動し、自らのために行っているように感じるが、実際は同じような問題を抱えている人たちが関わり合って助け合っているという相互自助や相互扶助という言葉が印象に残った。それは、利己的な自助ではなく、他助が自助になるという関係が生まれ、自助の連帯こそが協同するために必要であると感じた。

- ・集団行動に重きを置いていた時代から次第に個人が尊重されるようになり、講義中にも行政にまちの運営を市民が一任するようになったように、まちの運営と市民の生活とを切り離して考えるようになったがために今の問題が起きていることから、「協同組合の活動が今地域社会に貢献している」というよりは「協同組合が担う地域での役割の重要性を再認識した」というのが正しいように思いました。この講義を通して今の協同組合がどのような活動をしているのかを具体的に見ていくだけでなく、以前の社会で人々はどのようにして自分たちの町を支えていたのかを研究したいと感じました。
- ・協同組合とは、資本主義社会と並行で、成長してきた組織であり、いつの時代でも、事業を通じて、人々の共通目的を達成することを目標とし、弱者の味方となってきたことが分かった。それぞれの時代、それぞれの組織で、どのような共通目的を掲げてきたのか、また、世界が変化していくに伴って、どのように人々の共通目的や目的を達成するためのアプローチ方法が変化してきたのか、とても気になった。この講義を通して、様々な協同組合の方々のお話を聞くことによって、漠然としか想像できない協同組合について、具体的なイメージを持てるようになりたいと考えている。
- ・企業や、行政がメインとなって社会を作ってきたという今の風潮の中、企業や行政だけでは補えない社会的役割を協同組合が今後将来の中で重大な役割を果たしていく。そもそも自治、相互扶助と相互の自立、尊重といった社会を念頭に置き、国家を形成していく際に国家に頼りすぎず市民自ら行動に出ることの大切さ。
- ・今後の日本において地方創生が叫ばれている中で、何か行政が政策を行う場合では地域の協同組合の持つ市民側からの視点やノウハウが有効であると思うし、自然災害のような困難な状況でも協同組合のネットワークが失われつつある地域のつながりを補完する重要な役割を果たすのではないかと思う。
- ・人間は助け合い生きていく生き物だということを再確認できました。大震災という非常事態により、自然発生的共同から自覚的協同に変わったことは地域の中における協同の大きな進歩であったと思います。現在、新型コロナウイルスという感染症が流行しています。この新たな壁を乗り越えることによって、地域の協同はさらなる進化を遂げるのではないかと思いました。今回の講義で共同・協同・協働の3つの「きょうどう」について改めて考える良い機会になりました。どれも意味は違うけれど私たちが生きていく上で欠かせないものです。身近なものでいうと大学の生協があります。生協があるおかげで食堂や購買が運営されており、私たちは支えられています。また、私たち組合員の意見はその運営に反映されるように努力しています。このようにお互いがお互いを支え合うことによって、より良い生活を作り上げているということを再確認しました。これから私たちがさらに高みを目指すためには、「きょうどう」によって自身が支えられているということを自覚する人を増やしていくことが必要だと思いました。また、協同組合の良い部分だけを見るのではなく、課題や問題にも注目し、解決していくことが必要であると思えます。協同組合と組合員の努力が良い生活への繋がりに思えました。

以上